

協調ブロック幕間の物語

兵部省の小役人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この話はH a i g氏主催の世論型A A R「バルト海は再びスウェーデンの海となるか」

の登場政党「国際民主協調ブロック」に登場するキャラクター達のサイドストーリーです。

素晴らしいコンテンツを生み出し、参加を許可していただいたH a i g氏、

そして全ての参加者と読者に厚く感謝申し上げます。

目次

旅立ちの1935年	1
友と出会う1936年	6
ストックホルムの休日1936	13
エプレボリ伯の帰還1940	23
狩人2人とスオミの1941年	27
ネズミ捕りが再起する1944年	41

旅立ちの1935年

「ただいま」

書齋から漏れる明かりを頼りに扉を開く。そこにいるのは小柄な僕の義父だ。

「お帰りなさい、アレク。また飲んできたんですか？」

タイプライターから紙を取り検分するとそのまま封筒に押し込む。

「ほどほどに、でしょう？ わかっているさ義父さん。そちらこそまだ仕事を？」

「幸い、記事のタネはいくらでもありますからね。……年末の総選挙は小党乱立になるでしょうから」

義父、ベルティ・ビョークルンドの仕事はジャーナリストだ。政治がらみを中心に幅広く手がけている。

確かに総選挙が迫るとなると稼ぎ時なのだろう。

「政治の事は良く分からないが大変そうだね」

僕、アレクシス・ニユースロット||ビョークルンドは彼の養子だ。今はスウェーデン陸軍の士官学校に通っている。

「アレクも有権者でしょうに」

「まあスウェーデンで暮らして10年だから何も思わないわけじゃないよ。」

でも義父さんと喧嘩するのも、言いなりになって投票するのもどちらも嫌だからね、お互いに」

僕はブリテン島がウースターの生まれだ。極左独裁勢力を率いるモズレーの扇動によるバーミンガム蜂起に巻き込まれた際に父の知人だったベルティ・ビョークルンドに手を引かれ、逃げ出したのだ。

そして——蜂起の仲介に立とうとした自由党の市議だった両親は殺された。

イギリス連合は今自由主義左派のスノーデン子爵と旧労働党勢力が辛うじて抑え込んでいるが——義父は自由党左派と労働党の双方と交流を持っていたこともあり、非常に複雑な気持ちを抱いている。

「あらら、一本取られてしまいました」

「ハハハツ、頼もしくなったかな」

ええ士官学校に行つてからは尚更に、と義父が少し寂しそうに笑つた。

「……アレク、軍人で生きていくつもりですか？」

最初はスウェーデンで生きていくのであれば、と思つた。僕はウェールズの血が混じつたイングランド人でスウェーデンで10年育つただけだ。

だからこそ将校の経歴が欲しかった。兵士になつても他民族であればろくでもない扱いを受ける事はわかつていた。義父の経歴を頼つて社会的な信用を得るよりは幾らかはマシな気分になる。

「貴方が政治家になるのであれば猶更ね」

だが——数年前からどうにも政治がらみの行動が多くなつてきた。

我ながら嫌な義息だと思う。

僕たちは義理の親子であり、同じ暴力革命の被害者であり、僕の命の恩人であり——もはや自分でもうまく表現できない間柄だ。

「……誰から聞いたのです？」「ハンマルさんから」

義父にとつては家族ぐるみの付き合いがある親戚のような間柄らしい。大手会計事務所の代表者だ。僕にとつても叔父のような存在だ。

会計士の癖に機密を漏らすとはどうかとも思いますね、と溜息をつく。

「国防省では軍閥が割拠し、社民党の勢力は衰えています。保守勢力は分裂し、排他的な風土は高まっている。英仏もドイツもノルウェーとフィンランドを勢力圏に組み込もうと画策している、この国はいつ空中分解してもおかしくありません」

言っている事はわかるがそれでも——

「だからといってよりによって貴方が矢面に立つ必要はないでしょう。」

僕たちが受けた仕打ちは左派右派の双方が極論に走つたからだ。

巻き込まれたくせにまた同じことをしようとするのは莫迦のする

事だ」

僕達を裏切ったのは労働者でありブルジョアであり——彼らの相互不信であり——民意だ。革命だろうと護国だろうと知った事ではない。僕らは夫婦喧嘩で小突き回されて割られたカップのようなものだ。どっちが割ったかなぞどうでも良い存在だ。

タイプライターの音が止んだ。

「……それで「この国でも自由主義が否定されたら」私はどうすればいいのです」

僕よりも若々しい顔立ちなのだがその目だけだ虚ろに暗い。その奥に映っているのはきつと、炎の手があがるバームンガムか、頭蓋を叩き割られた年長の友人達か、それを呆けて眺めている12歳の僕か。或いはそのすべてか。

だが僕は僕の幻影に付き合わされて破滅する義父を見る趣味はない。

「ドイツでもカナダでも行けばいいでしょう。僕はついていくよ

ハハハツ、アメリカが落ち着けばあそこも面白そうだ、ロシアは次の大統領がどうなるかわからやめておくとして、神秘の国ジパングも面白いかもしれないね。

逃げて回るのは得意じゃないか」

義父が目を睜り、クスクスと笑い出した。

「なんですか、20も過ぎて旅行のおねだりですか？

まったく、皮肉を垂れ流すのは誰から教わったのやら！

……止める気はないわけですね？お互いに」

憎たらしくふんぞり返って見せる。

「皮肉か、今特大の皮肉を義父さんにぶつけられてるよ。

僕はいつ辞めたっていい。やめるなら士官学校を放校されるようなことをしたい相手はいるもの。——でもあなたは出馬する気でしよう？」

義父は頷いた。

止めても止まる人間ではない事はわかっている。真面目で柔和で他人事を気にしていつもブレーキ役に回るくせに、一度決めたら頑固

なのだ。

「義父さん、貴方は大莫迦だ。僕の父達がのつかった塀は崩れおちた、ハンプティ・ダンプティはカナダまで転がり落ちた。それなのにスウェーデンで自分がハンプティ・ダンプティと一緒に塀の上にまた昇る気なのかい？」

「ハハハッ首相を目指すとは言うてないじゃないですか。私の同志が居ればその人を支援します。

小党乱立を上手く制御して今こそ中道政党、左派を包括できる穏健な中道政党を創るチャンスです。

社会断裂が悪化する今だからこそ私が——いえ、我々がやらねばならないのです」

義父は確かに一種のカリスマがある。だが、それでも、いや、だからこそ、か。それが僕には我慢がならなかった。

「地方議会なら幾らでも応援しましたとも、ああ。貴方が知事になりたいといえれば心から応援した!!」

でも貴方はよりにもよって神輿に乗るつもりか!?畜生!自傷行為以外のなんだというのだからこれが!」

気がついたとき、僕は椅子を蹴り倒し、政治家の道を志した恩人に向かって、それこそ組合を扇動する革命屋のような身振りで怒鳴り散らしていた。

「……ごめんなさい、でも決めたのです」

義父と目が合うのを急に何もかもが莫迦らしくなった。

「ハンマルさんはなんと?」

「あの方が顧問を務めている社会協同党に紹介していただきました時に、やるなら責任を持ちなさい、と」

地方でそこそこ勢力があるがそれだけの政党だ。その程度ならば問題ないと思っただか?それとも……あの人は義父さんに甘すぎる!同情のつもりか?クソツツ!

「……当然向こうは喜んで担ぐわけですね。わかりました。

それならば好きにしてください、僕も好きにしますので」

いつその事、万が一この人が国を牛耳るのであればそれも一興だ。

どうであれ僕が軍人の身分を手に入れる事は悪くない。少なくとも僕自身にとつては。

「アレク」

「もう士官学校に戻ります。次に会う時はお互い、国税を食む身でしよう。」

ただでさえ莫迦な事に首を突っ込んでるのだから

これ以上、妙なことに首を突っ込んで死なないで下さいよ」

「ああそれと」「なんですか」

「皮肉屋なのは貴方から学んだんだよ、義父さん」

扉を閉める。

そして選挙が始まり——卒業を控えた連中も固唾を呑んで隙あらばラジオを聞いている。

ストックホルムでフランス製戦車とドイツ製戦車が争い、国粋主義の将校達は命令に違反して動き回り、軍主流派はストックホルムへ全部隊を結集させようとしているらしい。

「政治屋に踊らされて好き勝手言ってる奴が多いな……戦車で暴れまわる連中と手を組んでるのをよく信じられるものだな。

……おい、大丈夫かニュースロット！顔色が悪いぞ」

「……すまない、ちよつと胃が痛くてね。家族がストックホルムにいるもので」

ああそれはお気の毒に、と心から同情を浮かべた同期を見送る。

ラジオから聞こえるニュースをいつそ切ってしまったほうがましかもしれない。ここまでひどいなら僕もストックホルムに残るべきだったか……！

友と出会う1936年

野党第二党の中道左派、この立場は非常に負担がかかるものです。与党は穏健化したとはいえ元は極左勢力と難解な経済政策の結果として軍事的拡大を唱える謎の政党の連立。

野党第1党が公然と民兵を組織する民族主義の軍国独裁主義政党。彼らは文字通り砲火を交わす事になりかけたばかりとあらば。

……そう、目の前の熟練した国際政治学者である北欧連邦民主党の初代党首が引退を決意する程度には辛い立場である。

「やはり考え直してはくれませんか？」

肯定の返事はない、わかっていても聞いてしまう。

目の前の初老の紳士は申し訳なさそうに目を伏せて予想通りに返答をした

「すまない、だがこれでは私が保たないよ……申し訳ないが君に後を任せることになる」

私はどれほど情けない顔をしていたのだろうか？

もしくは。この頃にはもう癖になっていた虚ろな微笑を浮かべていたのだろうか？

それでも彼を批判する気にはなれない、彼の気持ちは痛いほどにわかる。

列強に囲まれ、閉塞したスカンジナビア半島の再建、近代スカンジナビア主義の再興という壮大な夢を抱いて政界に飛び込んだのは彼は間違いなく傑物だった。

ヴァーサにも人民連合にも与さずに、吹けば飛ぶような弱小政党だった私の社会協同党と手を組み、中道左派をとりまとめるまでに至った。

それでも勝つことはできず。穏健派として与野党の調整に終始従事しなくてはならなくなった。

「しかしながら後任を任せられるものもなかなかあ……」

この党は外交政策の党、知識人が趣味で集まったような政党だ。政局に強いものはそうそうおらんよ」

「こちらも似たようなものです……協調ブロックは産まれたばかりの寄り合い所。

足りないものはいくらでもありますが、人手が足りない。

次の選挙までに一つの政党にまとめたいですが、その為にも取りまとめ役と時間が必要だ。

そうなる と 幹事長は非常に重要な役です。ブロックのカラーを決める事になる」

40年選挙に備えるためにもブロックを取りまとめなくてはならない。

私は内戦を避けなければならない。自由民主主義を守らなければならない。

「総裁、36年選挙を戦った結果、我々は届かなかった。我々に足りないものはなんだと思う?」

「……決断力、ネットワークの軽さ。その為の執行部体制を作ったつもりです」

非常事態続きだったことはあるが、取りまとめる時間があまりにも足りなかった。

執行部制度による事実上の総裁への集権化、他党の人々すらもろ手を挙げて賛成してくれた。

誰もがもどかしかったのだろう、もっと早く手を付けるべきだったのだろうか。

「ああ、良い考えだと思うが、それはもう君が言ったとおりだ、すでに改善に手を付けているだろう? 私の答えは違う、分かりやすさ、これが我々には欠けている」

「分かりやすさ、ですか」

「私も君も、連盟の役員達も、精密さ、格調の高さ、そういったものに惹かれてしまう。」

だがね、市井の人々はそれに目を通すとは限らないのさ。

もっとわかりやすく、率直に。他の視点を持った者が………」

びたり、と動きが止まった。

「幹事長?」

率直、単純明快、ああ、と笑った。

「いや、少し面白い事を思いついただけだ。そうだな、君はまだ若い、良い刺激になるだろう」

「本日の夜は確か空いていたね？」

「は、はあ」

急にニコニコと笑みを浮かべだした。何を考え付いたのやら
……

「ビョークルンド君、私は一市民として君達の活躍に期待しているよ。
これが最後に幹事長として協調ブロックに貢献できる事になると
良いが……」

私の肩を叩くと彼は鼻歌を歌いながら幹事長室を出て行った。

彼は二度とこの部屋に戻ることはなかった。

「どうぞ」

「んん？なんで女の子がスーツ着てここにいるんだ？進歩党の人？」

確かに私の身長はせいぜい155cmですよ？顔立ちも確かに年
より若い童顔です。

「……イエーオリ・パルメ議員、自分の会派の総裁の顔くらい覚えて
もらわないと困ります」

イエーオリ・パルメ、元無所属の北欧連邦民主党議員だ。身長は大
柄、固太り気味で腕も首も足も太い。左肩が締まっている。典型的な
兵卒上がりの労働者だ。

下士官かもしれないが、偉ぶった様子がないからおそらく熟練兵
だ。

指にインクが染みついている、おそらく印刷の工場に勤めていた。
赤ら顔で少し酒臭い、良い意味で「組合活動」が好きなタイプなのだ
ろう。

観たところは、経歴に詐称はないが——何とも、『彼』とは真逆のタ
イプで今までの執行部、いや協調ブロック主流が全く異なる。

「すいませんね、俺も何が何だかわかってないもんで」

そういうが顔は不機嫌です、と全力で主張していた。腕を組んでソファーに身を沈めた。

「……まあいいでしょう。パルメ議員、わざわざ御来訪いただき感謝します」

「はあ、そいつはどうも」

実直というよりも不愛想そのものの返事。どうもダメなようだな、と思いながら略歴を読み返す。

「ロシア内戦に参加。そして10年間ロシアで学ぶ……どこで、学びましたか？」

「ケレンスキー先生の下で働いてました。そのまま政府の工場で働きながら10年かけて夜学で勉強しただけです」

「ケレンスキー……大統領ですか？」「内戦中に下働きしていただけです」

「……お悔やみを申し上げます」「どうも」

「それで働きながら、ですか」

驚いた、それで無所属で当選して、インテリ政党の北欧民主党に転がり込む。

中々できる事ではない。一年生、いや、ベテラン議員だとしても異様な度胸の持ち主だ。

……私にはできないだろう。尻尾を巻いて震えているのがオチだ。

「すみませんね、アンタみたいにエライ大学をでているわけじゃないモンで」

不機嫌の度合いが増した。知識人嫌い、しかしながら武力蜂起をする程急進的ではない労働者。

民主主義を護る為に結集する理念に共感して彼がここに来てくれたのであれば、私は彼に応えるべきだ。

嫌々であっても私と対話の席についてくれたのだから。

「ごめんなさい、そういう意味ではないのです10年をかけて勉強して、どこの党にも属さず無所属で出馬する。よほどの信念を持っているのでしょう？」

私は、貴方の選択を尊敬します、そして協調ブロックを選んでくれたことは、私にとっても光栄です」

そう言つて微笑みながら手を差し出す。

「えっ？……その、そう言つてくれる、議員センセイは二人目です、その、ありがとうございます」

手を取つてくれた。ならば大丈夫だろう、と安心する。

むっつりとした顔は変わらないが少しだけ赤くなっていた。

妙にわかりやすいな、と思つた。純朴、とでもいうべきなのだろう。

先ほどのまでの厳つい印象がどこかに飛んで行つてしまった。

少しだけ、アレクに似ているな、と思うと親しみが湧いてくる。あの子もひねくれているようで素直な子だった。

「いくつか質問をします。気楽に答えてください。変に取り繕つても後で苦勞するだけですからね？」

協調ブロックの政策。パンフレットをとりだす。

後は彼が政治家として何を目指しているのか見極めるとしよう。

そして思つた以上に彼は率直だった。分かりにくい、読みづらい、途中で眠くなつた。

パンフレットはたちまち修正のペン入れで染まっていた。

「あははは……いやあ、手厳しいですね……これ、皆で作つたときには良いものだと思つたのですが」

流石に少々落ち込んだ。原稿がボツになる事は珍しくないし、校正で大恥をかくこともよくあつた。でもそれよりなにより、出版された後に不評をかうと辛いものだ。

「すみませんね、いい事を書いてるんですが、俺達みたいなもんにやわからんですよ」

先ほどまでと違つて困つた犬のような顔をしている。屈強な体を縮ませると、途端にを思い出してしまった。

「いえいえ、むしろ助かりました。これはパンフレットの問題です。

本当は興味も関心もない人にも読んでもらうものですから」

「へえーそういうものですか」

「こほん、と咳払いをする。」

「…………最後に一つ、聞きましょう。【貴方は争う人たちをどうやって止めますか?】」

「飲ませます」

「はい? ええと…………どういう意味です?」

「だから! 飲ませるんですよ! それで解決です!!」

「えーと、和解の条件をですか? いえ、だからそれをどうやって、とお尋ねしているのですが…………」

「違う違う! 一緒に酒飲んで、美味しいもの食って、笑えばいいんですよ! そうすればあつという間に友達だ!!」

心なしかパルメ議員の目がキラキラと光り輝いている。

「…………本気で言ってるんですか?」

自分が何をやっているのか分からなくなった。

そんなことであの争いがとまるわけもない、だけど本人は大まじめだ。

「本気だとも! 少なくともそうやって綺麗な顔をしているのに重苦しい顔をする方が間違ってるさ!」

「…………」

「私だってそうさ!! アンタの言うような小難しい話なんかわからん!! そこらの店で酒でも飲んでる方が性に合う!! そして友達もできる!! 票が取れる! 簡単なことじゃないか!!」

なんで私を支えてくれたあの老賢者はこんな男を寄こしたのだろう。私が求めていたのはもっと真面目で、高度な…………。

…………ああ、そうか。自分の傲慢の虫に気がついた。『彼』が今の私を見てニコニコと笑っている姿が目には浮かぶ。

「…………フッフツ! なるほど、なるほど、そういう事ですか」

あの人らしい、というべきか。回りくどいように率直なやり方だ。

そうだ、あの人が言う通り、私には彼が必要なのだろう。

「何がだ…………ですか?」

目をぱちくりとさせている新たな相方の手は大きかった。

「ええ、ええ、素敵な答えです、いいと思いますよ!」

あまりに単純で明快だからこそ、目もくれない事を言ってくれ

る。それは【人間】を見る為に私たちが忘れてしまう事だ。

「それにですね、ここでそういう簡単なことを言える人はとても、とても貴重です」

不安ではあった、あれこれ言われるのだろう、とも思った。

それでも彼が良い、と私は決めた。頼りないのはお互い様だ。

それならば私と全く違った彼のような人間が居てくれることは幸運に他ならない。

協調ブロックも自分もまだまだこれからなのだから、きっと彼が必要になる。

そう思い肩を叩こうと思ったが……届かなかった。

「決めました、パルメ幹事長。明日からよろしくお願いしますね」

「え？幹事長??？私が？」 「えっ?」

「えっ?」

……どうにも私はうまく決められない性質のようだ、お互いに。

ストックホルムの休日1936

俺、イエーオリ・パルメが良く分からない理由で協調ブロックの幹事長になってから半月ほどのころの話だ。

幹事長と言っても俺にわかるのは選挙のことぐらい、三つの政党が一つになるといいう事がどれだけ面倒なのかもなんとなくしかわかっていなかった。

休みの日は、普段は飲み歩きをしているのだが、たまたま手土産になる菓子をもたらした事もあり、本部の皆をねぎらってみよう、と思つたのがきっかけだった。

本部は暫定的に社会協同党の本部が兼務しているが、出迎えたのは進歩党から移ってきた事務局の女の子たちだった。

「ちようどよかったです！総裁も喜びますよ！あの人甘いもの大好きですから！」

事務員がニコニコと笑いながら返答する。彼女達はいち早くこちらに移っている事にビョークルンド人氣が影響しているのは公然の秘密だ。

政治評論で小難しいことを書いたかと思えば食べ歩きのコラムを書いたり、何が専門なのかよくわからないがああ体の癖に良く食べるのは知っている。ルックスと相まって女性人氣は高い。

「……総裁？今日は休みじゃあないのか？」

「いいや、まだ合流後の資金やら選挙区整理やら、やることは山積みだよ、幹事長くん」

初老の偉そうなオツさんが台帳をわきに抱えて奥から現れた。ミリュコーフ先生にちよつと似ている気がする。

幹事長に任命された後にあいさつした事は覚えている。名前は確か……

「え？えくと、確かハンマルさんだっけか！サイフ委員長！」

ブフツ、と噴き出すと肩を震わせながらハンマルさんはソファァーに体を沈めた。

「ちよいとおしいな、私は財務委員長だよ。残念ながらサイフにやな

れんさ、逆さに振つてもすつからかんよ、カミさんを通してくれんとトフィーも食べられんのさ」

総裁を呼んできますね、と事務の子が奥に引つ込むと見慣れた顔がひよつこりと顔を出した。

「おや、幹事長。今日は休暇だったのではないですか?」

背中で結んだ長い金髪、碧眼、なめらかで白い肌。女性のような顔。そして俺の肩くらいの背丈。何度か写真で見た顔だとは思ったが、直接会うとなおさら女の子のようだ。

「総裁こそ休みではないのか?いつもここにいるのか?」

「フフフフツ、まさか、流石に普段は帰ってますよ」

「どう見えても子供もいますからね!まあもう22ですけど」

「は???」

確がまだ40歳だから...20歳前に産んだ...もとい孕ませたのか!?

「ビョークルンド君、冗談も程々にしなさい」

目を回してる俺を見かねたのかハンマルさんが苦笑いを浮かべた。

「アレクセイ君は彼の養子だよ、彼がイギリスから逃げる時に連れてきた子だ。」

「この間士官学校を卒業したばかりでね、まあ今はドタバタしてるがそのうち引き合わせるよ」

「どうも軍の騒ぎのせいで落ち着かないようで、私達もしばらくは大忙しですからね」

選挙中に反乱謀議が行われ、現在は大騒ぎらしい、チエーカーみたいな連中が動き回っていると飲み仲間から聞いたこともある。

ニユースロット君は着任数か月でノルウェーに送られてしまう。

俺が彼に会えたのは翌年の冬が訪れる頃だった。

「そんなにやることあるのか?」

「ええまあ新党とはいえ三つの政党を統合するのですから、それなりに面倒事がありますとも。ですからこまめに空いた時間にやっただけです。」

管理部門の再編だけでなく政策能力もそれぞれ得意分野が違いま

すからね……幸い、それぞれ治安担当や外務、文部系に伝手がありますがこのまま軍部が再編されるのであればそちらにも伝手を作りた
いのですが……ああそれにフィンランドの動向次第ではドイツとの
関係も……現政権首脳部にもパイプを作らねば……」

やっぱり話が長いし、よくわからんが、心配事があるのならば手伝
うのが俺の仕事だ。

「すまない、参考までに見せてくれないか？私も手伝えるかもしれん」
「えつちよつ、ちよつと待ってください！」

構わずに総裁室に入るといくつも見覚えのあるファイルが執務机
の上にあつた

「総裁……これは私の仕事のはずだぞ！なんで幹事長の仕事をトップの
アンタがやってるんだ!?!」

答えはうつすら分かっている。

「……もともとは私の仕事でしたからね。貴方が苦手な部分くらい手
伝いますよ」

そう言つて総裁は肩をすくめた。

「無理に慣れないことを頼んでいるのですから、これくらいは当然で
しょう?」

頭がクラクラしてきた。当選一期目で【下っ端の俺】を幹事長に、な
どと言い出したのだ。

よほどの変人揃いなのだろうかと思つていたがここまでとは。

ハンマルさんも俺の目下にされたのに文句も言わないでフォロー
に回ってくれていたのだろう、金持ちのインテリは嫌いだがどうにも
変な奴らにばかり出会つてしまう。

「よし……わかつた……これは全部私がやる！だから後で2人がかりで仕
事を教えてくれ！」

その代わり今日はアンタも私も休みだ!!私に付き合つてもらおう
!!」

「……はい?いや、ダメですよ、ハンマルさんと片付けなければならな
い仕事はまだ……」

「急ぎの分はもう終わつてる、後の手続きは私がしておくから問題あ

るまいよ」

「えつでも……」

ハンマルさんが俺にいたりと笑い、俺に手を振った。

「幹事長、よろしく」「おう！」

「えつちよつと待って……ひゃう!?!」「まあまあ、ほら、行こうぜ！総裁さん！」

軽いな、と思いながら担ぎ上げて部屋を出る。

「幹事長！幹事長！待ってください！そのまま!!」

鋭い声で事務の女の子が俺達を呼び止めた。何かと思うと——どこからともなくポケット・コダックを持った女性陣が俺達を取り囲みフラッシュを焚かれた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！これで我々もあと十年戦えます!!」

幹事長たち【も】どうか楽しんでください!!」

グツと鼻から血を出しながら親指を突きだす進歩党のお嬢ちゃんたち。

……ロシアも大概だったがスウェーデンも政治にからむと変な奴しかいないのかもしれない。

「なんですか、……?」

「賭場だよ、賭場。いいじゃないか、金をかけて勝てばスッキリ酒が美味い、負けたら酒でも飲んで忘れちまおう!!」

「同じじゃないですか、まったく……」

お酒を嗜むのは良いですが、節度が大事ですよ。賭け事だって同じです」

ミリユコーフのおじきみみたいな説教を始めようとする総裁にズビシーと指を突き付けて黙らせる。

「なあに言ってるんだ!!いいか！やすみってというのはな！

……こういうところでパーツ！と遊ぶのが作法だぞ！

そして美味しく酒を飲むんだ！これが人生の楽しみってやつだ！」
「……頭が痛くなってきました」

溜息をつく総裁の背中をバシバシと叩く。

「ハハハハハッそれなら何か遊んだらどうだ？ほら、あそこのトランプとかどうだ！」

「トランプもあるのですか……学生の頃はよく遊んでました」

何をやっていらのやら、賭け事とは縁がなさそうだ。

ここは俺が率先してやり方を見せてやるとしよう！

「そうかそうか、まあこの流儀をドーンと見せてやるよ！ガハハ！」

「よう大将！大出世したそうじゃないか！どうだ！タイムンでガツンと一勝負！」

ディーラーは愛想よくこちらに向かって手を振った。

・

・

・

「すまん。もう一回、もう一回だけ……」

俺の私用の金はあつという間に向こうのディーラーがの机に山積みになってる。

幾ら何でも政治用の金はみんなのなけなしの資金だ……こうなると残りをすべてブチこんで——！！

「随分と熱くなってるようですが。もうやめた方がいいと思いますよ」

背後から冷え切った声が飛ぶ。振り向かないのは怖いからではない！

漢たるもの過去は振り返らず前に進んで勝利あるのみだからだ、本当だよ、すごく本当

「いや、待ってくれ、次で、次でとりかえすから……」「私が見る限りそれは【絶対に無理です】。ほら、もう帰りましょう？」

「……ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ、せめて、せめて取り返さないと月末の酒代があああ」

酒が切れたら人生の楽しみがなくなってしまう！ノーアルコール

！ノーライフ！！

「……取り返したら帰りますか？」

ガクガクと首を縦に振ると総裁は苦笑いを浮かべた。

「わかりました、わかりました。それでは代わってもらっても？」

「……うう頼むよ」「大丈夫ですから」

ニコツと微笑みながら座る総裁を見るとああたまにこういう人が居るんだよな、と思う。

将校でも議員でもたまにこういう不思議なこの人なら大丈夫、と思わせる雰囲気を持つ奴がいる。問題は中身が伴うかどうかだが……

「お嬢ちゃんどつかで見た顔だなあ」

ディーラーが不思議そうな顔をする。男だと思って写真を見るのと実物を見るのでは印象が違う。俺もそうだった。

「あははは、気のせいですよ。同じくラミーの三本勝負、掛け金は彼の負け分全額でどうですか？」

「おっと大きく張ったな！一見さんだから運が向くかねえ」

ディーラーはニヤリと笑うとカードを配る。

「ノック。一目客には運が向くようですね。ジンです」

「ノックです。続けますか？」

2連勝、運が良いのもあるがカードの切り方にも迷いが無い。イギリスで何をやっていたのやら……。

「ハハハハこりや参った！アンタ才能があるよ！」

ディーラーが朗らかに笑った。

「じゃあ仕切り直しだ、それを倍にでもしないとダチの敵討ちにはならんぞ？」

「いえいえ今日はこれで……」

「まあまあそういうな、せつかくだから、な？」

ディーラーの声に嫌な響きがする。ああそういう事か、とようやくわかった。

“大丈夫”というのもそういう事か、ならば。

「いいぜ！相手になってやるよ！」

「取り戻したら止めるんじゃないんですか？これ以上欲を張ると

「……」

「いいからいいから、俺を信じろ！それとも【俺に決めた】って言ったのは嘘なのか？」

キョトンとした顔をしたビョークルンドが普段の微笑と違う笑みを浮かべた。

「……今回だけですよ？何かあったら頼みますよ、パルメ君」

「ガハハハッ！おいしいビールくれビール！」

ビールを飲みながら周囲の様子を見る、何人かがこちらをじっと見ている。ああやっぱり面白くなりそうだ！

「ノック、俺の勝ちだ」「おや、まあいいでしょう、次」

「ノックです」「なんだと！……貴様」

デイーラーの顔色が変わる。

「どうしました？」

ビョークルンドは涼しい顔で続きを促す。そして最後のラウンド、デイーラーは眼を血走らせてビョークルンドの手札を睨みつけている。

「……ノック、ジンです」

「ふぎけるな！イカサマだ！」

「おや、そちらが用意したカードで、シャッフルもそちら。私が不正をする余地はないはずですが」

微笑を浮かべたビョークルンドの声が喧騒を貫く。大声を出しているわけでもないのに周囲の人間を黙らせる。

そうした【天然物】はたまにいる。軍にも政治家にも。

ロシア内戦とその後を見てきた一般人として断言するが、それは幸福な才能だとは限らない。

「それとも【勝たないと不自然な仕掛け】でもしていましたか？例えばこのカードの裏に細工をしている、とか」

負の感情がまつたくないのに何故か怒っている側が言葉に詰まり、一歩下がった。

何人かが立ち上がり、こちらに向かってくる。俺はジョッキを傾けた。

けち臭い店によくある底が分厚いものだ、普段はムカつくが今回ばかりは丁度よい。

任されたことはこなして見せるのが【良い兵隊】であり、信頼に応えるのが友人だ。

「今ならまだ間に合いますよ。もうこれきりに……」

「テメエッ！」

妙な圧に耐えきれなかったのか、ここを仕切るメンツにしがみつくことを決めたのか……まあどっちでもいい。

ビョークルンドの前に立ち、最後のジョッキの底に残った泡を飲み干す。

「よつと」

ゴツと鈍い音がしてディーラーが白目をむいて気絶した。ジョッキは傷一つついてない、どれだけ底が分厚いんだ、この野郎。

「ほい、勝ち分」

机の上に乗せた賭け金をディーラーの金入れに突っ込み、ビョークルンドに投げ渡す。

「……えっええと」「よし走るぞ！」

出口を塞ごうとした馬鹿にジョッキを投げつけ、机を蹴り飛ばす。道が開ければ後は簡単だ！

・
・
・

街区を一つ挟んだ地区、俺のダチが仕切ってる組合の支部がある、ここまですれば安全だ。

「ハハハハハッまさか総裁……いや、ビョークルンドからあんな風にかますとはな!!」

「……まさかあんな荒事になるとは」

「えっ」「えっ」

「……だって私が不正する余地がない状況を作ったのですから向こうが手を出したら賭博はもう成り立たないでしょう？」

まさかあそこまで短絡的とは……」

元から真つ黒な賭場なのだが言わない方が良いな。

「まあまあいいじゃないか！ビョークルンド！アンタは博打でも堂々と勝ったんだ！」

「むう……まあそういう事にしておきましょう。」

ああそうだ、結局これどうしましょうか、結構分厚いですけど」

銀貨に紙幣に……結構な大金だ。

「アンタが勝った金だろ？好きにしなよ、どうせ騙してとった金だ」

「……ふむ、君はあの賭場が潰れたら困りますか？」

「いいや」「では貴方が騙し盗られた分だけ抜いておきましょう、後は私が然るべきところに戻るように手配します」

「いやいやいや！あんたが取り戻してくれた分だろ、今回は俺が悪かった、半分持つてくれ」

「え……」

ずいっときっかり半分を押し出すと溜息をついて受け取った。

「わかりました、わかりましたよ、半分いただきます」

「私が店を決めますから食事に行きましょうか？」

「どうせアレだろ、自分のために使うのもなんかモヤモヤするから

俺とパーツと使おうって思ってるんだろ？いいよ、アンタについて行くぜ！」

「わかりました、それではロシアレストランなんてどうです？」

ペテルブルグから移ってきた腕の良い店主のお店を知ってるんですよ」

「おいしいな！ロシア料理はウオトカが美味しい、ビールも美味しい最高だ!!」

「ダメです、ダメです、パルメ君はさつきも吞んでいたじゃないですか、今回はお酒抜きです」

「そんな馬鹿なっ！酒のないロシア料理なんてロシア料理じゃないぞ！

それにビールは酒じゃないぞ！あれは解けたパンだ!!」

どこで習ったんですか、そんなことばかり。と言いながら俺の新し

い友達はくすくすと笑った。

「おや、【私について来る】といったばかりでしょう？」

にっこりと笑って俺の背中をポンポンと叩いた。

「行きましようかパルメ君。なに、私の楽しみ方もいいものですよ、きつと」

エプレボリ伯の帰還1940

「ふう……今日もいい天気じゃなあ、太陽神ソレンの恵みを受けた果物が良く育つじやろて」

うん、と背中を伸ばす。これまで軍中枢への道を駆けあがり、情報部部长に中将人事局長と裏方の統括を務めるまでに至った。

もう過ぎ去り過去の事だ、俗世の権力の事は忘れよう。

ジャムで伯爵家も建て直し、宗教も社会に根付きつつある。適度に政党に献金をして過度に右にも左にも振れず、安定した世界を作っていけば……

「ほほほ、あれほど遮二無二動き回っていた時よりもこうしている方が、

もしかしたならば何もかもがうまく儂の目論見通りに転がるのではあるまいか？」

などと云ったのが間違いだったか、彼の平穩を自動車が目の前でドリフトをかまし、切り裂いた。

「失礼します！」「官邸の方から来ました！」

「ほ……？首相用ジャムの納品についてなら会社のほうに……」

この国で一番ジャムを貪っている人が今の首相である。お得意様兼広告塔である。

きつとそのことだ、そうであってくれ、それにしても殺気立ってる気もするが気のせいだと思いたい。

「首相と副首相が急ぎお会いしたいとのことです！」

今からご同行願ってよろしいでしょうか！よろしいですね！」

「……ええ？」

「ええ言質ヨシ！」「任意ヨシ！」「合意ヨシ!!確保!!」

黒服二人ががっしりと両脇を抱えて車に放り込んだ。

「えっ……何事じゃああ!!」

「……えくと」

宇宙の深淵を見た猫のような表情のまま固まっているエプレポリ伯を見てビョークルンド首相はどうしましょう、と頬を掻いた。

「首相、時間がありません。本題に入りましょう」

五十路絡みの温厚そうな顔たちの聖職者のような雰囲気をもつた男性が声をかけた。

「そうですね、えくとエプレポリ伯。よろしいでしょうか」

「ほっ？ああこれは首相閣下に副首相閣下」

「単刀直入に申し上げます。貴方に国防省参与か内閣安全保障参与として働いてほしいのです」

ふう、とため息をつく。予想の範囲ではあった。

「御二人とも、儂は自分でいうのもなんじやが政治屋將軍の一人じやった。」

ホールリンはまあ孫がおかしなことをやっておるだけじやがリツケルトは今も健在、儂を担いでも面倒ごとが起きるだけじやて」

「そうはいかないのですよ、36年から国防省が大変なことになっているのは御存知でしょう？、とりわけ陸軍がもうノルウェー以下といえますか……」

首相は頬をつらせながらちらり、と横の副首相兼国防大臣に視線を送る。

聖職者として来るべき全体主義とキリスト教世界の対決としての世界大戦を予見し、科学技術者として航空機、原子力の発展を唱える「アブラハムの啓典盟約党」の党首でもある。

「我々としても困るのです、空軍の技術開発が命題で際限ない陸軍、海軍の拡張は人的資源の面からも反対していますが、フィンランドの動向次第では陸軍がメインになります。三軍のうち、空軍にこそ技術的な飛躍が期待されますが、だからといって機能不全になるのは論外です。」

当事者である伯には今更でしょうが、前政権では4年間、政治的に主要なポストの将官、将官に内定している佐官を徹底して排除しました。

ノルウエー進駐で功績を上げたものを穴埋めにはしていますが……」
行政面でのノウハウがある人間が枯渇している、ということだ。

「育てようにも教えられる人がほぼいないんですよ、イエルハルド閣下は軍の浄化という点では素晴らしい仕事をなさった」

問題は組織の中樞が丸々いなくなつたことですが、と首相は肩をすくめた。

警察庁から憲兵まで巧みに使いこなし、徹底して病巣を取り除いたようだ、少なくともスウェーデン軍においては。

「人材育成にもかかわる人事と情報管理から再建したいと思うのです。他の分野はそれに付随して改善するでしょう」

「現在戦略単位の処理がノルウエー進駐時の泥縄をどうにか体系化してる状況ですがね」

「なんで戦争をしてないのに末期戦状態なのでしょうね」

乾いた笑いが官邸に響く。

「つまりですね、組織を建て直すために制服組からの知見を持ったベテランが必要なのです。兵站や戦略の面では自動車化を進める事と並行で新たにノウハウを作っていくことが——時間はかかるでしょうが、やむを得ますまい」

「伯にはそれを支える人事、政策部門の管理の体制強化、情報組織の再建、教育制度の見直しそしてそれらの再体系化をお願いしたいのです」

それは即ちほぼ全部では？エプレボリは訝しんだ。

「ああそうですね、こちらから出せるものは……給与はまあ次官級に準ずるとして、後は……そうですねえ、議会政治家として我々が提供できるものは、どうでしょうか？」

「我々の党は教会が支持基盤ですので」

「ふむ、ここにいない彼らは対外政策は一致していますがハイ・ミドル重視の政党ですが——中道右派政党ですし彼らに相談して——」

「いえ、お待ちください。私から少々……」

首相は眉をひそめるが、副首相が何やら耳打ちすると微笑を浮かべ

た。

「あなるほど……いいでしょう、乗りますよ。パルメ君には私から説得しましょう」

「協調ブロック総裁として、公認の推薦を受け付けます」

「ほほう」

成程、隣の盟約党首殿も中々の狸のようだとエプレポリ伯は自然と笑みを浮かべた。

そしてそれを即座に採用した首相も同じく。

「そうですね、農水部会のポストでいかがでしょうか？」

完全に食品企業グループ扱いである事に一瞬違和感を感じなかったがいや待て待て、とかつての部下達の顔を思い浮かべる。

「むむ……国防部会もつけてどうですか？」

「では将校の復役は原則として認めない、というのを条件に」

イエルハルド肅軍で追い出された者達を軍中枢に戻す事を認めない、という事だ。

「……ほほ、いいでしょう」

手綱を着けられることは想定していた。であるならば議会に送り込むだけでも十分だ。

「では契約成立という事でできるだけ早いうちに——そうですね今週中に」

「首相、大臣！緊急事態です！」

補佐官らしき男が息を切らせて駆け込んできた。

「なにごとですか！」

「フィンランドがイギリスに宣戦を布告しました！」

「……………」

政権首脳の二人は視線を交わし、頷き合った。

「今から宜しくお願ひします、伯」

狩人2人とスオミの1941年

補給、補充、再訓練。戦訓の反映に人事評価。

それに加えて情報部との連絡に現地政府、議員からの苦情対応……どこでもそうであるが偉くなるというのは酷く面倒な話である。中尉と言っても任官4年目であるが、中隊長が戦死してから送られてくるのが新品少尉ばかりで僕がそのまま正式に中隊長の辞令を受けたことが『スカンジナヴィア陸軍の現状』を知らしめている。

「中隊長殿、来客です」「通せ」

伝令の後に入室したのは僕の部下であるボルグ曹長だった。ノルウェー進駐のころからまで僕の補佐として小隊を切り盛りした男だ。中隊長が早々に戦死したおかげで僕のいた小隊の小隊長にさせられてしまった不運な男だ。

「中隊長殿」

ボルグは困ったような顔で背後の一团を示す。

「失礼、ニユースロット中尉ですねぇ？」

声の主は若い女であった。甘ったるいがどこか人を小馬鹿にしたような声だ。

ややいい加減に整えた長髪に隈の浮いた目。ポケットからは無地の計算尺が飛び出していた。それだけならば学生か駆け出しの科学者かといった見立てであるが、4名程の屈強な体躯をスーツで包んだ男達を引き連れている事が酷く不釣り合いであった。

「連合警察庁公安局のアンナ・アルフベン警部補と申しますう」

「技官ではないのですね」

視線の先に気がついたのか計算尺を振って、にへら、と笑った

「あら、よくお判りになりましたねえ？」

「それなりには暗号関係も携わりますので」

「結構、結構、頭が回る方のようによかったですよお。」

すみませんがあ、少々御協力いただいてよろしいでしょうかあ？」

「構わんよ、ああ座ってくれ。ど君達の用語だとなんといったか。警備犯罪についてかな？この国も連合政府の法体系下にくみこまれた

のだから、正確に言えば君たちの管轄になるのはわかっている」
「……人払いを」

「ボルグ小隊長を同席させてもらっても？」

「人払い」をお願いしたのですけどお」

甘ったるい声の中に苛立ちの色がこもる。

「僕が戦死した場合、次は彼が中隊長になるだろうからね。今の状況だとそれもありうる」

「なるほど——わかりましたあ」

わざとらしくため息をついて、合図をすると二人が外に出た。軍を信用してないのか或いは——残った1人が最年長のようなだ。

「彼の事は“副長”と呼んでください」

懇懇に一礼をし、彼女の横に座ると書類鞆から資料を取り出した。

「中隊長さんの御説の通りですねえ。【連合警察の支援を受けた現地警察】への移管を進めていくのが政府の方針ですう」

「それで君達が来たわけか？第一陣か、お若いのに大したものだ」

「ええ連合警察であれば平時であつても問題なく活動できますので、それが首相閣下の意向ですよお」

笑みを深めて胸を反らす、意外とあるな、と思つたら隣に控えた副長が睨みつけてきた。別件逮捕されそうなので慌てて目を逸らす、怖い。

僕の隣に座るボルグ君は固い声で反対する。

「残念だがまだ警察の手に渡すのは無理がある」

若い客人は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ラプア運動はもともと反共農民を主体とした農村運動。独裁化してからも地方の富農階級を主体として反共、反露運動をつづけていた草の根運動ですう。」

【反スウェーデン】の要素が加わり根はさらに深い、軍だけでは根絶が難しい状況では？」

反論しようとするが言葉に詰まった相手を見てアルフベン警部補は勝ち誇つたように微笑する。

「お二人の様子を見るとやはり随分と苦勞なさっているようですねえ」

「正規軍同士とは話が違う相手だからね、治安戦は面倒だよ、君の先達たちも知悉しているだろうがね」

「軍が酷く面倒を起こしましたからねえ」「班長」

「・・・はいはい、それで一応は軍と連合警察による共同警備をもって一刻も早く武装組織を叩き潰す、という事ですよお。」

「そうそう軍に対応して一応、中尉相当官になりますのでよろしくお願ひしますねえ」

貴方が先任ですけどねえ、と笑みを深くする。

連合警察だとそうなるのだったか。地方警察の警部補は少尉相当官だったか？ややこしくて覚えていない。

「君は本隊が来る前の下地作りの手伝いというわけか。構わないよ、我々があまりに長くここに居るのは問題だ」

肩透かしを食らったような顔をしてアルフベン警部補はうなずいた

「ではよろしくお願ひいたしますねえ」

「やれやれ絵にかいたような進歩黨員でしたね、彼女は」

「今は協調ブロックだよ」

ボルグ曹長はかわらんでしよう、と苦笑を浮かべた。気の強い女性エリートといえば進歩黨員というレッテルもどうか思うが言いたいことはわかる。

「だが大したものだよ、男社会で身を建てようとするのだから」

不自然なタイミングの宣戦布告、そしてプロイセンクーデターに仏露戦争とバルト海の南はなおも戦火に覆われている。

この状況でほんの少し前までドイツ皇帝の義弟と反動農民とロシア軍人の寄合が取り仕切っていた国にやってくるのだから大したものだ。

「俺達はいつまでここにおるんでしようかね」

ボルグ曹長がぼつり、とつぶやいた。

「当面はこのままだろうな。共和国政府が安定するまでは僕達がする事は“保護監督”だ。」

彼女達に一刻も早く引き継いでもらいたい——
まったく、随分と上等な立場になった物じゃないか？」

「トロンハイムでエンフィールドを担いだ連中に追い回された時と比べれば多少はマシですかね？」

「まったくだ！」

乾いた笑いが響いた。

・
・
・

それからおよそ一月ほどが経った。

彼女は何をどうしたのかヘルシンキの通信監視網を構築したようであった——非公式に。

軍や高等警察中枢を制圧したとはいえこの短期間でよくもまあ度胸があるものだと思う。高慢に振舞っているが能力は本物だと感じる。

「ふむふむ……思った以上に本格的ですねえ」

とはいえ過去の記録を重視するのは変わらない。アルフベン女史は中隊本部に持ってこさせた資料を片端から目を通してはいる。

相も変わらず名前を名乗らない“副長”も感心したように頷いた。彼はベテランらしくさりげなく新任班長を補佐している。

「専門家レベルですよ。どこでここまで？」

「ノルウェーで痛い目を見たからな、地理、区画、住んでる人間の傾向、可能な限りの略歴。それなりには調べている」

憲兵へ移った同期からすら偏執的だといわれることがあるが、一度死にかければいやでも学ぶ、1度ゲリラに囲まれ、2度上官が爆弾を投げつけられて殺されれば学びの度合いの深くなるというものだ。

ノルウェーは互いに悲惨だったそうですからねえ、とアルフベンは

ため息を吐いた。

「イエルハルド首相は軍に対して徹底して対決しましたから軍の体制も混乱したままでしたが、ビョークルンド首相閣下になって軍もずいぶんよくなつたでしょうねえ」

正確に言う間違いだ。前政権下でも兵士の給与や待遇などは（事務方の混乱はともかく）国力の伸張につれて改革されていた。

だが将校の扱いについては——まあその前の段階から政治的策動が酷かったので僕のような人間からすると仕方なかったのではないかな、とも思う。

「どうかな、肅軍にノルウェー軍との再編を挟んで混乱が続いているのに早々にフィンランドと戦争だ。」

必要な時には将校を道具として躊躇なく利用するのは前の首相と大して変わらんよ」

現場の人間からすると無茶な戦争だったのは変わらない。兵站の混乱を表面化させないために中央も現場も泥縄の対策を続けていた。

「んな、っ！そんなことありませんよお！宣戦布告だつて不本意な事だつたに違いないです！」

「不本意なのは確かだろうが、機能不全だろうと必要なら割り切つて使うタイプだ。」

好き好んで将校となつたのならば国家の道具であれ、と本気で思っているよ、ホルスト首相とその点は同じだな」

ある種の教条的な冷徹さを持っているのは共通しているのは似ていると思う。

だが彼女はそう思わないらしい、顔を真っ赤にして僕に文字通り噛みつくのではないかと思わせる勢いでまくし立てる。

「あの方を！ビョークルンド首相閣下を！極左の陰謀屋と一緒にしないでください！！

貴方はどこを支持してたんですか？まさか独裁政党じゃないでしょうね！」

ビョークルンド【首相閣下】か、いやはやまったく！僕にとっては性質の悪い冗談にすぎる！

笑いの衝動をどうか友好的な笑みへと変えて警部補へと向ける。「ハハハッ！僕は生憎だが国粹主義者や民族主義者からは排除の対象でね。僕はブリテンの生まれだよ、25年にここに流れてきた。」

肅軍がなかった場合にどのような扱いを受けたのか正直僕には何とも言えないな」

肩で息をし、耳を真つ赤に染めていたお嬢さんは息を整えるときこちなく笑みを浮かべた。

「・・・そうでしたねえ、すみません。私は進歩党員でしてえ・・・」

副長は我関せずといった様子で資料を眺めている。どの程度の付き合いなのか分からないが彼女との扱い方に熟練しているようだ。

「君の政治信条をあれこれ言うつもりはない。ただ僕は軍人として政治に深入りはしたくない——ああやはりそうか」

「副長」が僕から受け取った市役所から押収した資料に目を通して笑みを浮かべた

「裏流通のハブになってる人間ですね、ですが不自然に顔を出さなかったので臭いと見ましたが、あたりだ」

「うん、かつての民兵隊幹部だ、敗戦の際に武器を隠し、住民登録を改竄して逃れていたようだな——とはいえ、下手につくと暴れた後にロシアなり旧バルト連合なりに逃亡を図る可能性もある」

何度か迂闊な奴が手を出して逃がしたことがある。兵力を出し惜しみするからだ。

「私が行きますよお、警察の仕事ですう——とはいえ軍の協力も必要ですかねえ」

「・・・ボルグ曹長の第二小隊を何時でも動かせるようにしておく。」

僕も現場に出よう」

「いえ、私が指揮をしますよお」

「副長」へ視線を送るが彼も唇を引き結び、口を閉ざすだけだ。

「君は新任の捜査官だったな」「1年間は暗号分野にいました、軍との協力もしてますよお」

「現場の経験がないといっているのだ。君が事前に調べているのならわかるのだろう。」

「嘗めてかかると危険だ」

口元のいやけた表情がさつと掻き消えた。

「中隊長、【私がなぜここに来たのか】考えてください。」

一度警察が現場責任者として指揮を執った前例が必要です。

軍と適切な協力をした前例が——」

普段の甘ったるい口調ではなく、静かな悟性を感じる声だった。

実態が追いついてもいないのにか、と喉元まで出た言葉を飲み込む。だからこそ軍政を長引かせたくないのだ、という側面がある事も理解せざるを得ないからだ。

フィンランド全土の情報が渡る軍政司令部でもなく、師団司令部・連隊本部でもなく僕のところに来た理由がそれか。便宜上は同格やや上の軍側の人間とやり取りをした前例が欲しかったのだろう。

それが警察と軍の管轄争いにどれほどの意味があるのかは——分からないが。

「君は幾つだ」「24です」

1年間暗号解読機関にいたと言っていた——何を考えてこんな現場に出てきたのだろうか。

「君はなぜここに来た、志願か、それとも上からの命令か」

「……志願しました」

「君は望んでここに来た、まだここに居る事を望むのだね？」

彼女は無言で首肯した。僕の周りに来る奴はどうしてこう、自分から面倒に首を突っ込むのだろうか？

いや、自分で志願して23で人を殺した人間が何を言っているのやら。

「いいだろう、君に第二小隊を預ける。」

君は君自身の責任と判断において行動するといい。

曹長は実戦経験者だ、運用は彼に任せてくれ」

「ありがとうございます」

懸念というものが的中しても嬉しくもならない。だがそうした類の物ばかり正解になるものだ——翌日、彼女達が検挙作戦を開始してから1時間後、僕はボルグ早朝から無線で呼び出されることに

なった

ヘルシンキ郊外のちよつとした酒場が現場であった。
車から駆け下りると出迎えたのはボルグ曹長でも小隊軍曹でも、副長でもなかった。

へたり込んだまま涙を流している【現場指揮官である】アルフベンと彼女の部下の遺体であった。

判断能力を失った上司を後方に移送したらしい”副長”はMP28を手に部下を叱咤激励しつつ、煉瓦やらを盾にして応戦している。

「何をやっている！貴様は指揮官だろ！」

頬を張られたアルフベン警部補は怒りもせず、呆けたままだ。

「あつ……ニュースロットさん……」

「飲め」

スキットルを押し付ける。中に入っているのは葉を煮詰めた紅茶に角砂糖を限界まで放り込んだ危険物だ。締め切りに追われた頃の義父から学んだ一品である。ジャムの方が多少は健康的だろう、知らんけど。

咽込みながらも彼女が飲み終えた頃にボルグ達が戻ってきた。この辺りは熟練の下士官である彼は【心得て】いる。

「班長、〴〵指示を」

新任少尉に対する下士官そのものといった慇懃だが有無を言わさぬ口調で促す。

「ちよつと待つてください」

十秒ほど目を閉じ、開いた時にはいつもの彼女が戻ってきた。

「……〴〵協力感謝します、中隊長殿。曹長。

被疑者は7名ほど、1名は間違いなく負傷しています。武装は小銃が最低でも人数分。

可能な限り殺さずに確保を目標とします

一度威嚇射撃と降伏勧告を、従わない場合は正面で陽動し、その間

に裏と両横の窓から突入

正面からは軍の援護を受けつつ警察が合同突入を」

よろしい、と頷いててみせる。

「曹長、君は第二分隊を直卒して裏に回った方が良いだろうと思う」

「班長、それでよろしいでしょうか？」

「突入時は短機関銃の使用許可を」「許可します」

「車載の擲弾筒で催涙弾を撃ち込みたいのですが」

「……人数分のガスマスクは？」「もちろん用意しております」

「突入前に試みましょう」

「味方の誤射に気をつけるよう、各突入班に指示を出すといいだろう」

「はい、そのようにお願いします」「発令されたぞ！急げ」

兵達は命令を受けて動き始めた。後は僕のこととはさしてない。

「副長、あちらとの直通電話は？」「確保しています」

アルフベン警部補は確かな足取りで歩き始めた。

その翌日、僕達はヘルシンキ周辺を統括する師団司令部に呼び出された。

流星に人死にを直接見た昨日の今日では顔色が悪い。

「捕縛5名、射殺2名。こちらは負傷者2名に死者1名、押収した武器は小隊を賄える数だ。なかなかの成果だよ」

要人暗殺に使うのであれば国を麻痺させることができる。

「君は生き延び、犯人も検挙した。なくなつた部下を悼むの事も大切だが、次もある事を忘れないでくれ。ああもちろん君が望むのであればだがね」

さて、どうしたものか。もしも彼女が職を辞すのならばハンマルさんにも手配をお願いしてみるべきかな、などと考えているうちに彼女は

「ニユースロットさん、私はここに残るつもりです、残るにふさわしいと判断される限りは」

僕達を出迎えた参謀長は報告書について幾らかやり取りをするため息をついた。

「なるほど、暫定政府で民主化を進めているとはいえ民兵はストックホルム並に存在するのか」

ストックホルムは一応我が国の首都なのだが。といおうと思ったがそれを言うと多分この場にいる皆が頭痛か胃潰瘍になるだろう、迂闊に触れるべきではない。

「まあいいさ……ニユースロット中尉、君に來客だ。

……君の御父君の知人だよ。ニユースロット||ビョークルンド中尉」

参謀長はそう言つて頬を引き攣らせた。

かしこまりました、と返答する僕も多分似たような顔になつている。

「……ビョークルンド?」

背後から聞こえる声の持ち主を意図的に無視して來客の下へと向かう。

「エプレボリ伯爵エリック・ヴァルデマーじゃ。内閣安全保障担当参与をやつておるよ」

好々爺然とした老人だ。だが上質な素材で仕立てた軍人風の服装と豊饒とした身振り、そして何より名乗った名前だその印象を裏切る。

彼は穩健派を名乗りながらも情報部と人事局をまとめ上げて議会議事などを行いながら中道派の首魁として振舞い続けた謀将だ。

義父が招聘したとは聞いてたが――

「自動車化歩兵第一連隊第3中隊中隊長のアレクシス・ニユースロット||ビョークルンド中尉であります、閣下。

彼女はアンナ・アルフベン警部補です。連合警察庁公安局の現地派遣要員です」

「ああ、良くやっていると聞いておるよ。この件については儂が担当じゃ。

ゆつくりと話を聞きたいところじゃが——すまぬが彼と軍機に関する話があるので、申し訳ないがちと外してくれぬかの？」

「はっ！」

アルフベン君は奇麗に礼をして退室した。

「——さて、ニュースロットとビョークルンド中尉。義父上も心配しておったぞ。何故3年も連絡を絶っておった」

義父——ビョークルンド首相の使いか、と溜息をついた。公私混同をしない人だが流石に専科学校に移ってからまた音信をたつたとなると、怒るか。

「ノルウエーの件で随分と騒がれましたからね。

トロンヘイムが占拠された際に後衛戦闘と奪還の際に随分と無茶をしましたので——近代スカンディナヴィア主義政党的総裁と同じ名前を名乗るわけにもいかないでしょう」

僕の返答に老伯爵は少し意地が悪そうに笑った。

「ふむん、なるほどのう。それで今度は女性捜査官と組んで首相の一人息子がゲリラ狩り。4年前の自分が被って危なつかしくて見えてはおれぬからかの」

「トロンハイムの頃とは話が違いますよ、あの頃よりは遥かにマシになりました」

自動車化に航空機の充実に補給物資の潤沢さ——初陣のころと比べるまでもない。

「変わったのは、軍の質だけではあるまいよ。お主の立場も変わっている事くらいわかるじやろう」

「はあ、とため息をついた退役中將は僕に向けて穏やかに語りかけた。

「政治に頭を突っ込まぬ事は結構じゃがの、お主の行動はもういつ政治的に受け止められてもおかしくないわい。

もう野党政治家の息子だったところと同じようにはいかぬ。

軍大学校に推薦するから、しばしそこで頭を冷やすがよい」

「・・・承知しました」

よろしい、よろしい、とエプレポリ伯は満足そうに頷く。

「しばし国防省付となつて勉学に励むと良い、来月の頭にはそうなるように手配をしておこう。義父上も会いたがつていたぞ」

「ここを離れる前に少しよろしいでしょうか……私からも気になる点があります」

「そう長い時間はとれぬぞ、公用もあるのでな」

元情報部長、安全保障担当参与、この件の統括者。この人に今尋ねておくべきだろう。

「今我々が頭を悩ませていた話の発端です、この軍需物資の大量流出は本当にラプア運動だけの手で起きたことですか？」

確証はない、そもそもラプア運動のシンパは軍將校団にも数多くいた。

だが、それでも意図が読めない、反ラプア運動色が濃かった地域に王党派の親独勢力、マンネルヘイム元帥らの親白軍地域まで組織的に軍需物資が消えている。

「——その件に触れるにはお主はまだ早すぎる。立場上も、の」

先ほどまでの好々爺とした表情から一変、情報将校の顔を見せる。

「僕の手元を離れても、彼女は追いますよ、彼女は経験が足りておらずとも莫迦ではない」「そうじゃろうの」

彼女が去つたドアに視線を送ると老伯は肩を叩いて微笑した。

「首相の周りは左派が強すぎるからのお。再程言つたとおり、この件に関しては儂が預かる。安心せい、彼女を無碍にはせぬよ」

そうであればいいが——彼女は確かにネズミを捕る良き猫だ。だが——彼女が追っているのは“寧猛なネズミ”で済む獲物なのだろうか？

中隊本部に戻ると待ち構えていたのは怒り狂つた我が戦友であつた。ちなみに副長は耳栓をつけて事務仕事をしている。

あの割り切りの良さを見習いたいものだ。

「——よくもまあ……よくもまあ私をここまで！首相の悪口をいつてい

たのも！私を揶揄っていたんですかあ!？」

「シャー！などと聞こえてきそうな剣幕である。心なしか毛が逆立っているようにも見えるくらいだ。」

「すまなかつた、連隊内でもできるだけ隠していたのだけどね」

「そうでしょうねえ！4年も前から書類を弄っていたのですからあ！おかげで……」

「ジリジリと後ろに追いやられる。口うるさくて気の強い女性は苦手だ！僕はもっとお淑やかな方が好みだ。」

「いや、まて、落ち着け、アルフベン君。考えてもみろ、宣戦布告をした首相の息子がヘルシンキに駐留してます、なんて言えるわけないだろう、なっ」

肩で息をしながらアルフベン警部補が僕を睨みつける。

「……本当ですか？」

「ブロック党員の公安捜査官となると今後の為に見極めておきたい、という考えも無論あったが口にはしない。」

「それに協調ブロックの党員が相手ならなおさら言い出せなかつた、君は切れ者だから分かつてくれると思うよ、うん」

「ふむ、切れ者ですか……んふっ。」

「まあリスクが高いのはわかりますけどお、嘘をつかれてたのはねえ。」

「チヨロフベン警部補よ、それでいいの。いやそれだけ気を許してくれているのだろうか。」

「……それで？大学校ですか……フツ次にお会いする時は將軍様ですかねえ？」

「おっと、20年も顔を合わせたくないというのは少し寂しいな」

馬鹿馬鹿しいことを言って笑い合う。

「……」一つ聞かせてください、貴方はイギリスの生まれで、亡命してここでビョークランド首相に育てられて

「将校となり、ノルウエーとスウェーデンで戦争に従軍し、まだここにいます。」

「貴方はこれまでの事を恥じているのですか？」

「僕は恥じる事は多いよ、僕は褒められた人間ではない。

将校として兵を死なせることを何とも思わなくなったらと恐怖する事もある。

だが産まれと育ちだけは恥じたことはない」

「なるほど」

ふつと笑みを浮かべ彼女は手を差し出した。

「ぜひとも、貴方の義父様の話、聞かせててくださいいよお」

「ああきつとな——君がそれをタネにしない限りは」

和解の締めくくりなのに彼女はやましそうに目を逸らした。

ネズミ捕りが再起する1944年

ニューズロツト中尉と別れ3年がたった1944年のころである。私は3年間をかけてラプア運動の地下組織を追い続けてきた。私は43年には警部に昇進するくらいにはフィンランド国内捜査の専門家として評価された。

だが 潜伏するラプア運動協力者が危険視される最大の理由、消えた軍需物資の中核に辿り着くことはできなかった。時には大貴族の“寄付”がどんぶり勘定で計算されていたり、敗戦時にゼネストを起こした“労働者達”に占拠をされた工場だったり——不自然の先に行こうとすると“戦時の混乱”という盾が落ちてきて手繰る先の糸を断つてしまう。

フィンランドの地域有力者、そしてカレリアから我々を睨みつけるソビエト連邦とのパイプをほのめかすフィンランド極左勢力、そして時には今はカナダに逃れたドイツ貴族達。

——焦っていたのだと思う。私は“副長”達と共に兵站将校からラプア運動議員中堅幹部となった男が偽装した会社を通じて土地を運営しているという情報を掴み、検挙しようとしていた。

私は周辺の封鎖に際し、早く本命をとらえようと焦っていた。幌馬車に乗った小ぎれいな婦人の処理は部下に任せていた。

私はその時誰かに後ろから突き飛ばされたのだと思った。

赤熱した鉄の塊を押し付けられているかのように背中が焼けるように、もがこうと思っても体が動かない。

熱風に蹴り飛ばされるかのように体が転がった。耳鳴りがする、厚い幕に覆われているかのように発砲音が酷くぼんやりと聞こえた。

誰かが私を担ぎあげようとしたところで意識が途切れた。

・

・

・

スカンディナヴィア軍の病院に担ぎ込まれ、ヘルシンキで一週間、その後ストックホルムに移って一週間、軍医には運が良かったとい

われた。

私は拳銃で腰を撃たれ、更に手榴弾を投げつけられるところだったらしい。

運が良かったというよりも浮足立った私を冷静に支えてくれた部下達の献身だ。そしてその代償は——備品の自動車と私の脚だ

情報は本物だったが幾つかの数字が誇張された小物だった。私達は罨にかけられた可能性が高い、と”副長”は餞別に教えてくれた。

——餞別、だ。私は二度と足が動かない。3年間、ずっと追いかけてきた国を揺るがしかねない捜査から外される——いえ、外れなければならぬ事を意味する。

暗号通信技官として連合警察庁に入庁してから外務省の命令でフィンランドの通信傍受分析を担当し、現場捜査を希望して、私はフィンランド派遣団に手を挙げた。

幾つかの失敗と成功に彩られ——私は道を失ったのだ。

「やあ、運が良かったようだね」

「……ニユースロットさん」

相変わらずバイキングの面頬のような顔をしている。体つきも頑健であり、軍服を纏うといかにも軍人めいている癖に普段着だどこか間が抜けて見える。

「すまない、本当はこちらに帰ってきたらすぐに顔を出したかったのだが。どうも日取りが合わなくてな」

見舞いに来た癖に花の一つももっているのは……。

「なんですかそれえ？」

「チョコレートだ。カカオは栄養があるからこれで食べて英気を養うといい」

ついでにチョコレートは利尿作用がある、デリカシー的にも実用的にもダメダメだ。

年齢以上に達観しているくせにこうした時には間が抜けている。

「いただきますけどお、こういうのってえ花とセットじゃないんですかあ？」

「退院の日にとびきりのをもってこよう」

「左様で」

露骨に期待してませんよ、と返事をするがニューズロットさんは少し気まずそうに咳払いをするだけで食いついてこない。

——真面目な話がある、という事だろう。

「君はこれからどうするつもりだ？」

「さあどうでしょうかねえ？もう半分隠居みたいなものですしい？」

……申し訳ありませんけど少し疲れたので今日はもう」

私はこの人の事を尊敬している。だから、もう、止めてほしい。だが彼は私が知っている通り、武骨で生真面目な人間だった。

「なあアルフベン君、僕はこれまでも部下の世話をしてきた。良ければ君の——」

「やめてください!!お情けで食い扶持を恵んで貰うなんて!そんなことされたくありません!私は自分で!」

怒りにかられた私は……立ち上がるとした、「いつも」の通りなら「万が一これで回復の兆しが」あれば、だが私の脚はそれに応えられなかった。感覚もないまま私はベッドに倒れ込む。

「自分で——立つこともできない。……もう私に構う必要はないでしょう?大尉。」

私はもう現場に立てる人間ではありませんからねえ」

ケラケラケラと臆躁的な笑い声が虚に響く、私の声だった。

ニューズロットさんは目を伏せたまま静かな口調で私に語りかける。

「あまり自分を傷つけるような真似はよせ」

今度は視界が滲みだす。まるで自分の体ではないみたいだ。ほんの数年前の失敗よりも無様で取り返しがつかない。

「——1人にさせてください。おねがい、わたし、こんなみつともない」

あまりにもみじめで無様だ。私は部下を殺し、自分自身の身すら守れず、何一つ成し遂げられないまま——子供のように泣きわめいている。

「あー……その、なんだ。僕は、なにも、そのようなアレは」

「アレク、アレク、何をしているのですか貴方は……先に場を整えると言っておいて

私たちの為に戦った勇敢な女性を泣かせるのは感心しませんよ。

貴方の言葉は武骨にすぎます」

涼やかな声が割って入った。

「……今回ばかりは言い訳できませんね、大人しく敗走しますよ」

すまなかつたね、と私に目礼をすると病室を出た。

「……嘘」

金髪に碧眼、後で括った髪。何度も写真を舐めるように見た。講演にも可能な限り通い詰めた。【民主主義の砦】、【自由の灯台守】、と呼ぶ人もいる中道政治家の旗手であり、私の憧れ。前首相にして現政権の外務大臣。

「お会いするのは3度目ですね、アンナ・アルフベンさん。

ベルティ・ビョークlundです。アンナさんと呼んでも？」

「ホヒュッ！」

いきなりのファーストネーム呼びで心臓が跳ね上がった。

「ほ、ほひゅ？」

よしよし、落ち着きなさいアーニヤ、ちよつと今日は情緒不安定なだけ、私は大丈夫。

「い、いえ、喜んで！あつあつあの、私は」

「貴方は協調ブロックの党员でしょう？ええ、覚えていますよ、党大会の時に“統計学的見地から見た協調ブロックの展望”を作って私に渡していただきましたね。

フツッあの時はまだ学生さんだったのですね」

「え〴〵っ」

やめてやめてやめて、卒業研究が一段落した解放感で作った物なのです、やめてやめてやめてやめて。

「それにアレクにも良くして下さいましたそうですね。

あの子は——貴方の事を本当に心配していましたよ」

無遠慮な言い方をされたのでしようが、アレで優しい子なんですよ、と私に優しく微笑みかける。

「……申し訳ございません」

「いいえ、いいえ、違います。誤解を与えたのなら申し訳ありません。」

私が言いたいのは、あの子は貴方を高く評価しているという事です。

公私混同を嫌うあの子が私に有望な党員にして捜査官を見つけた、と自慢した位なのですから」

「さて、アンナさん。かつての首相、そして協調ブロック総裁としてあなたに問わねばなりません」

空気が脈打った。この方が演説を始める時は、どんなに騒がしくても静まりかえらせる、よく通る声にかわる。

「貴方は4年前に、貴方は産まれたての連合王国の首相を私が担えらると、そう信じてくれましたね。」

私は果たして貴方の期待に応えられたのでしょうか？」

私は無言で頷いた。声を発する時ではない、と空気が伝えている。

「でもね、アンナさん。私は貴方が思っているような人間ではありません。」

首相という職責は私の才能に余るものであることを自覚しなくてはなりませんでした。

この世界の流れはいよいよ激しく、今もなお自由の炎を飲み込む破壊の渦が渦巻いています。

一つ一つ判断するたびに自分の卑小さに対峙し、不安と戦わなくてはならなかったのです」

ふっ、と微笑を浮かべた。

「私が困難に直面した時に頼りにすべき知恵と、正義のあり方を示し、献身をもって多くの人々が我々を支えてくれました。」

人民でも国民でもなく、隣人を愛する熱のあり方を示してくれたのは私自身ではなく、私の傍にいてくれる多くの友でした」

足音を響かせず、するりと私に歩み寄ると、手をとり、ベッドに半身を起こしている私に跪いた。

「アンナさん、あなたはその一人です。貴方は私の下した判断に忠良

に従い、知恵と勇気を持って戦いました。私が与えた義務を果たし、深く傷つきました。私は貴方を尊敬に値する同志であると胸を張って言いましょう。

貴方の為にできる限りのことをします、貴方の選ぶ道を手助けしたいのです。

さあ——何を望みますか？」

「私は——私は悔しいです。こんなところで自分の選んだ道を奪われたくない！」

私は自分の価値を証明したい！こんなことで！こんなことで！！

私は哀れまれたくない！私は……」

声が窄む、懂れていた人に何を言っているのだろう。

もう役に立てないのに人間が……。

私の絞り出すような声を聴いた総裁は立ち上がり、静かに私を見下ろした。

「奪われたくない、示したい———そうですか、つまりあなたはまだ完全には奪われておらず、証明できるのですね」

「フォルセティ・クラブという警察内部の私的な交流組織があります。

アンナさんがもしよろしければ警察庁内に残ってそちらの管理運営の要員として動いていただきたいのです」

「警察の内部組織、ですか」

透き通るような眼なのに、引き込まれるように深く、虚な眼をしている。

私達が知る総裁とは違う、別人のような眼だ。

「ええ、そして今、協調ブロックではなく私が個人的に関係を築いています。

これからいろいろと【関心がある事】を話す事もあるかと思えます

——アンナさん、意味は解りますね？」

こくり、と頷く。協調ブロックは暴力的な闘争には一切関与せず、警察に情報提供をして危険であれば介入を要請するだけだ。

その範疇を超えた諜報活動を総裁が個人的に行う、ということだ。

「アンナさん、貴方は私が首相として与えた任務により、深く傷つきま

した。

それでも私の背中を守る道を歩むつもりはありますか？これは恐らく、私の友人たちを裏切る行為です。貴方が求める栄達はありませぬ、貴方を認めるのは同輩と私だけです、それでもこの手をとりますか？」

私は——彼の手を握った。

「総裁、私は立てませんが、貴方についていきます」

ゆつくりと、ですが。と言ったら総裁は私の頭を優しく撫でた。

「——貴方はそれで良いのです、ありがとうございます。私の大切な同志」

「で、3年ほどかけてリハビリを兼ねながらフォルセテイククラブの管理運営のサポートを行なっていたのですよお。

そうしたら陛下が私を『協調ブロックの改革をお願いします、貴方だけが頼りなのです』と！ウフフフツツ」

それから6年が過ぎた1950年の協調ブロック情報管理室が室長執務室。目の前でくねくねと動いているのが我らが上司、アンナ・アルフベン室長である。

“脚のない幽霊”と呼ばれている歴戦の公安捜査指揮官かつ情報分析官であるが、普段の様子は随分と柔らかくなった。

変わらないのは連合王陛下が絡むと知性が3桁くらい下がることと生活力が皆無であることくらいだ。

「室長、本当に銃撃戦の指揮を執ったことがあるんですか……」

フィンランドでラプア運動狩りをしていて撃たれた、部下も何名か殉職した、という話しか聞いたことがなかった。

「今のところ、うちでそういう事は考えられないってのは良い事ですよお。本当に」

少なくともスウェーデン、ノルウェーではこちらが下手を撃たない

限りは合法的な調査の範囲内であれば命の危険に晒されることはない。

あの【ハンソン】ですらこちらがよほど無法な行為をしない限りは——暴力的には——攻撃してくることはない。

「ベック君、とはいえ油断は禁物ですよ。貴方は捜査部門主任なんですからねえ」

室長の統制は絶対だ、俺は慌てて首を縦に振る。重要案件の仕切りは必ず自分に回ってくるという事だ。

「波瀾万丈ですね」

端的にまとめながらパイプを吹かしているのはメランドル、警察にいたことからの知り合いで共に室長に引き抜かれた情報管理室の最古参だ。

情報分析課の主任であり室長の秘書のような役回りを担っている。

「しかし、なんですか。こう言うてはなんですが、殿下とそこまで深いつながりがあったのにとんと、色気がないのはどうかと思いますよ」「なっなんですかあ！殿下とはお互い戦友としてですねえ！」

「……いやあ、室長。そんなこと言うてるからメランドルに先を越されたんじゃないんですかね」

なあ、と振るとメランドルは余計なことをいうな、と苦虫を潰したような顔をした。

「メツ、メランドルくん結婚したのですかあ!？」

「流石に時勢が時勢ですからね……書類だけで、式も何も挙げてませんよ、税金などはもう処理済です」

「メツ、メツ、メランドル君!!は！おいくつでしたっけ」「室長の三つ下ですよ」

「おっおっおっ奥さんは年上ですかあ?」「同い年ですよ」

ぶぎゅっ!と室長は机の上に突っ伏した。

「ふっふっふっまさか自分の部下に裏切られるだなんて……おめでとごうございますう……」

いいですよお、私なんかどうせえ……」

何とかしろよ、いやお前が言い出したからだろうと無言の会話を3

秒で終わると、メラन्दルはため息をついて立ち上がった。

食糧入れからツナ缶を取り出しキュポツと音を立てて開ける。

何故食糧入れがあるのかについて深く考える事はもうやめた。室長執務室と仮眠室はもう室長の私室のようなものだ。

いつの間にか巢を作られたよ、とハンマル幹事長が苦笑していた事を思い出す。

「ああああ!!私のツナ缶!!」

室長は何故か缶詰が好物だ——というより缶詰の中身をパンにのせて食べながら仕事をするか

“通信管制室”の怪しい機械を弄りまわしているかのどちらかだ。

仮眠室は立ち入り禁止だが大量の空缶が山積みになっている事だけは公然の秘密である。

「室長、今日はトマトとツナの Pasta でいいですか?」

時計を見るともう昼休みの時間だ。

「やったあ!おねがいますう!」「あつメラन्दル俺もいいか?」

こいつの料理は旨い。進歩党の女性陣より美味いかもしれない。新婚の秘訣はそこにあるか。

「材料は室長の自腹だからお前さんは3人分の飲み物買ってきてくれ」

「おう」「あつ私アイルンで!」「俺はコーヒー。カフェ・ストックホルムで深煎りを」

「はいはい、了解」

1950年、戦火はシベリアへ遠のき、国際色が活気へと結びつき始めたストックホルムの街頭へ歩みだした。